解説

水の巡礼

渡辺裕一（作家・コピーライター）

不思議な旅の物語である。頁を繰ると、そこに広がる風景は雨上がりのようにいつも滲んでいる。吹く風は、いつもやわらかく澄んでいる。真柄慎一の眼を通すと、日本の風土と日本の人々はまだまだ捨てたものではないものとしてそこにある。ゆたかさを目ざして突っ走り、かさかさ、がさがさ、ぎすぎすしたいまの日本の風景はない。そこにはひと昔前の日本人のこころと人の交わり、山と海と川にかこまれて生きる市井の人々の暮らしがどっしりと存在している。この物語の真骨頂は、そこにある。釣りの旅というよりも、様々なことに出会いながら、自身のこころに釣り糸を垂らす旅といえるかもしれない。

今回原稿を読みなおし、私がとくにこころに残ったのは阿寒湖のアイヌコタンでのエピソードである（頁160～162）。土産屋で木彫りの魚を見つけて気に入った著者はそれを購いたいとおもい、それの制作者である店の主人にその値段を尋ねる。それは予想外に高額で、思わず「えっ！」という顔をしてしまう。すると主人は彼のふところ具合を察し、一気に値段を下げてくれた。そこで彼は、せっかく情熱をかけてつくったものの値を下げるのは良くないと言ってしまう。そしてそう言ってしまった自分の行為を反省しつつ、その主人の優しいこころに感謝するのである。ここに、真柄慎一の特質がある。

つまり、この物語に漂う独特の通底音のようなものはいつも感謝のこころなのである。山を見て感謝、人に会って感謝、その土地のものを食べて感謝、車のタイヤがパンクしても感謝。しかし、そこにあるのはけっして単純な性善説ではない。しいて言えば、アニミズムに近いものであると私は推察する。木や石や鳥や虫にも神や精霊は宿る、その森羅万象に対して感謝するという、日本古来のこころのありようである。そういう意味で、この旅は一種の巡礼と呼ぶことができるかもしれない。必要最低限なものを車に積み、水辺から水辺へと旅する男の聖地巡りである。

もちろん、彼の肯定的なものの見方は、ただの人の良さから来るものだけではない。彼もたぶん、旅の途中でイヤな目にも会ったであろう。コンクリートによる無残な自然破壊の現実もたっぷりと見たであろう。しかし、彼はそこで気持をささくれだてたりせず、自分の中でそのことに始末をつけながら旅をつづけ、この物語を綴った。ものを書く行為で肝要なのは何を書くかではなく、何を書かないかということである。彼はそのことを自然のうちに身につけているようだ。だから、文章にほどよい抑制が効いており、品の良さを備えている。文は人なり、である。

この本は、いまの世にあって、貴重なものである。平凡に見えて、きわめて非凡なこころで書かれた稀有な物語と言えよう。静かに、広く、永く読みつがれて欲しい一冊である。